

1 実りの秋

令和5年度「蒼穹祭」、コロナによる制限を設けない4年ぶりのフル開催で、3千人を超える大勢の来場者をお迎えして、盛大に科学技術高校らしい文化祭となりました。御来場くださいましたご家族、PTA、同窓会、地域の皆様、そして中学生のみなさんに、本校生徒たちの生き生きとした姿をご覧いただき、感謝申し上げます。



さて、秋が深まってきました。『実りの秋』、これまで積み上げてきた努力の成果が徐々にあらわれてくる頃です。いきなり大きなことを成し遂げようと意気込まずとも、まずはすぐ実行できる小さなことから始めて、コツコツと積み上げていきましょう。何度も繰り返しますが、まさに『微差は、大差』です。

2 「何で勉強しなきゃならないの？」

著者の講演を聴く機会があり、読んだ本に書かれていた内容の一部を紹介したいと思います。

人間は生まれてから死ぬまで、家庭、学校や社会でさまざまなことを、さまざまな人やさまざまなことから勉強します。その「勉強」の目的は、時期と人によってさまざまでしょう。

親御さんは、我が子に「何で勉強しなきゃならないの？」と聞かれたら、何と答えるのでしょうか。

学校でよい成績を取るため？ 有名学校に入るため？ 有名企業に就職するため？ 将来の生活の経済的安定のため？

また、みなさん自身は何で勉強するのでしょうか。

勉強が好きだから？ 親が「勉強しろ」というから？ 学校の先生が「勉強しろ」というから？ 有名学校へ行きたいから？ 有名企業に就職するため？ お金持ちになりたいから？ 人生、楽に暮らしたいから？

タテマエはともかく、ホンネでいうとすれば、さまざまな答えがあるでしょう。

私は、「フーテンの寅さん」が主人公の映画「男はつらいよ」(全48作)の熱狂的ファンで、全作を平均すれば5~6回、好きなものは10回くらい観ており、筋書きはもとより、台詞まで覚えているくらいなのですが、この第40作「男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日」(1988年12月公開)の中で、寅さんと大学受験に失敗し浪人中の甥・満男が次のようなとても興味深い会話をしています。

満男が寅さんに「大学へ行くのは何のためかなあ」と聞きます。中学校すらまともに出ていない寅さんは「決まっているでしょう。勉強するためです」と答えます。これは、きわめてまっとうな常識的な答なのですが、私のように日常的に現実の大学生を見ている人間からしますと、「勉強するために大学へ行く」ということは、必ずしも「決まっている」ことではないらしく、「何のために大学へきた」のかわからないような学生が少なくないのも否めないのです。浪人中の満男が悩むのも当然です。寅さんのいうように、本来は「勉強するために大学へ行く」のです。満男は続いて「じゃあ、何のために勉強するのかなあ」と質問します。

古代ギリシア以来、「何のために学問するのか」は多くの賢者を悩ませてきた問題なのです。『学問のすゝめ』を書いた福沢諭吉ならば「愚人にならず賢人となるため」

と答えるかもしれませんが。しかし、このような答は、いわば「賢人の答」であり、満男やこれから大学へ行こうとする者にとっては「空論」に聞こえるでしょう。

寅さんはさすがです。

「お前は難しいことを聞くなあ…つまり、あれだよ、ほら、人間、長い間生きてりゃあ、いろいろなことにぶつかるだろう。な、そんな時、オレみたいに勉強していないヤツは、振ったサイコロの目で決めるとか、その時の気分で決めるよりしょうがない。ところが、勉強したヤツは、自分の頭できちんと筋道立てて、はて、こういう時はどうしたらいいかな、と答えることができるんだ」と答えるのです。

そうなのです。

どうして、学校でいろんなことを勉強するのかといえば、それは「物事を、自分の頭できちんと筋道立てて考えることができるようになる」ためなのです。

いま、私は大学で「教育」に携わっているのですが、もし、学生に「何のために勉強するのか」と聞かれたら、この寅さんのように答えます。私には、これからの若い人たちに対し、この寅さんの言葉以上に的を射た答は見つかりません。

学校できちんとした勉強をしていない寅さんは、きちん^と筋道立てて考えられないことに劣等感を持っています。実際、そのために、寅さんらしい失敗を繰り返すことになるのです。しかし、寅さんは寅さんなりに、いつも「人間性」という観点での「筋道」を通して、と私は思っています。だから、私は寅さんの大ファンなのです。寅さんの「筋道」は学校なんかではなかなか学べない、人間として本当に大切なものなのです。しかし、そのような寅さんの「筋道」(私はそれが大好きなのですが)はしばしば現代の「社会常識」からずれてしまうために、さまざまな悲喜劇が生まれる次第です。

いずれにせよ、学校で勉強する本当の目的は、試験で良い点を取ることでも、「有名校」の入学試験や「有名企業」の入社試験に合格することでもないのです。それは、一つの「結果」にすぎません。それなのに、現実的には、多くの学校では試験対策的な「教育」が行われているのはまことに遺憾なことだ、と私はいつも思っています。自分自身の頭で筋道立てて考える智慧を付けるために、いろいろなことを勉強するのは、この「いろいろなこと」は「学科」だけのことではありません。趣味や遊びや部活動や、そのほかさまざまな「社会勉強」をも含みます。学校で何かを学んでも、それだけでは何もできません。自分の頭で筋道立てて考えることが大切なのです。

ですから「文系の人」でも「理系の人」でも、学校で(別に「学校」でなくてもよいのですが)勉強した人は「自分の頭で筋道立てて考えること」ができなければなりませんし、また、できるはずなのです。

私はいつも学生に「常識的な答を知っている人間になるより、物事の本質を問える人間になって欲しい」といっています。

いまの世の中、「常識的な答」はインターネットなどで、誰にでも簡単に得ることができそうですが、「物事の本質を問う」ということは簡単なことではありません。物事の本質が問えるためには、「筋道立てて考えること」が前提になります。ITが発達した社会が求める人材(人財)が「常識的な答を知っている人間」ではなく「物事の本質を問える人間」であることは明らかでしょう。

(志村史夫著『勉強ギライな子どもに「勉強の面白さ」を伝える方法 わが子の「21世紀型学力」を伸ばす!』から)